

景観フォーラム

巻頭言

七月を迎え、列島は本格的な夏の様相を見せ始めています。蝉の声が日増しに高まり、入道雲が青空に力強くそびえ立つ季節。私たちが日々向き合う「景観」もまた、この時期ならではの豊かな表情を見せてくれます。

緑が最も深く濃くなる夏は、自然景観の力強さをまざまざと実感できる季節です。田園地帯では稲が青々と育ち、風にそよぐたびに水面へと映り込む風景が、見る者に静かな涼を届けてくれます。山間部では溪流の水音が一層清らかに響き、森の木陰には人を引き寄せる奥深い静けさがあります。一方で、都市部では夏祭りや盆踊り、花火大会など、人々の活気ある営みが景観に鮮やかな色を添える場面も増えてきます。景観とは、自然そのものだけでなく、そこに暮らす人々の活動や記憶、そして世代を超えて受け継がれてきた文化が織り込まれたものであることを、夏という季節は改めて私たちに気づかせてくれます。

近年、気候変動の影響もあり、私たちが慣れ親しんできた夏景色そのものが少しずつ変化しつつあります。今年の夏も全国的に平年を上回る高温が予測され、最高気温四十度以上の「酷暑日」が各地で観測される見通しです。記録的な猛暑による植生への影響、河川や水辺環境の変化、そして都市における緑陰の減少などは、景観保全という観点からも決して見過ごすことのできない課題です。美しい景観を未来の世代へ確かに引き継いでいくためには、こうした変化を丁寧に見つめながら、地域の方々とともに対話を重ね、考え続けていく姿勢が何よりも欠かせません。

そのような中、明るい動きも出てきています。国土交通省は今月、長崎市中島川・寺町地区や奈良県生駒市宝山寺参道を「景観エリアリノベーション事業」のモデル都市として新たに選定しました。歴史的な街並みや参道景観を地域の力で再生・活用しようとするこうした取り組みは、景観保全が地域活性化の核となりうることを示す好例といえます。また、国交省が開設した「景観・歴史まちづくりポータル」では、景観・歴史・文化資源を活かしたまちづくりの事例や効果が広く発信され、全国各地での景観への関心が着実に高まっていることを感じます。

当フォーラムでは、引き続き会員の皆様とともに、各地域の景観が持つ固有の魅力を発掘し、その保全と継承に向けた学びと実践の場を積み重ねてまいります。まちあるきや研究会を通じて得られるひとつひとつの気づきが、やがて地域の豊かな景観を守る力となると信じています。厳しい暑さが続く折ですが、皆様もどうぞご自愛のうえ、ふとした折に身近な景観へ目を向けるひとときを持っていただければ幸いです。

特定非営利活動法人 日本景観フォーラム 理事長 尾崎孝行

<日本景観フォーラム 2026 年度年間スケジュール>

＊2026 年度とは 2026 年 4 月 1 日～2027 年 3 月 31 日のことです。

2026 年

- 4 月 21 日 (火) **第 1 回景観研究会** 総会・第 1 回理事会 (18:00～20:00) 於：JICA オフィス
- 6 月 13 日 (土) **第 1 回景観まちあるき** 【大宮公園界隈】
- 6 月 30 日 (火) **第 2 回景観研究会** (18:00～20:00) 於：JICA オフィス
- 7 月 11 日 (土) **第 2 回景観まちあるき** 【下北沢界隈】
- 8 月 夏休み
- 9 月 15 日 (火) **第 3 回景観研究会** (18:00～20:00) 於：JICA オフィス
- 10 月 17 日 (土) **第 3 回景観まちあるき** 【鶴見】
- 11 月 24 日 (火) **第 4 回景観研究会** (18:00～20:00) 於：JICA オフィス
- 12 月 17 日 (木) **忘年会** (場所：要検討)

2027 年

- 1 月 23 日 (土) **第 4 回景観まちあるき** 【羽田】
- 2 月 16 日 (火) **第 5 回景観研究会** (18:00～20:00) 於：JICA オフィス
- 3 月 27 日 (土) **第 5 回景観まちあるき** 【草加】

■以上のスケジュールは、ご提案ですので随時皆様のご意見を反映してまいります。

<日本景観フォーラム 2025 年度年間スケジュール実績>

＊2025 年度とは 2025 年 4 月 1 日～2026 年 3 月 31 日のことです。

2025 年

- 4 月 4 日 (火) **第 1 回景観研究会** 総会・第 1 回理事会 (18:00～20:00) 於：JICA オフィス
- 5 月 15 日 (木) **第 1 回景観まちあるき** 【池袋】
- 6 月 24 日 (火) **第 2 回景観研究会** **オンライン** (16:00～18:00)
- 7 月 26 日 (土) **第 2 回景観まちあるき** 【秩父】
- 8 月 夏休み
- 9 月 24 日 (水) **第 3 回景観研究会**
- 10 月 24 日 (金) **第 3 回景観まちあるき** 【石岡】
- 11 月 25 日 (火) **第 4 回景観研究会**
- 12 月 23 日 (火) **忘年会** (イタリアンダイニング DONA 有楽町店)

2026 年

- 1 月 24 日 (土) **第 4 回景観まちあるき** 【鶴見】
- 2 月 24 日 (火) **第 5 回景観研究会**
- 4 月 4 日 (土) **第 5 回景観まちあるき** 【柴又】 ※3 月 21 日 (土) から日程を変更して実施

シンガポールの植物園巡り景観まち歩き

石見茂夫

2026年4月中旬の5日間シンガポールを訪問しました。シンガポールは東南アジアの中心都市で空運や海運のハブに成る重要な拠点として世界に認められた大都市です。熱帯に位置しているので通年常夏の気候で多くの樹木や花が咲く非常に綺麗なところです。滞在日数が少ないので今回は開発が進むマリーナベイエリアと新旧の植物園を中心に散策する行程を計画しました。

シンガポールへは日本各地から直行便が多く飛んでいます。今回は首都圏から一番便利な羽田空港を朝出発してシンガポールに向かうJALの昼行便を利用しました。フライト時間は約7時間ですが快適な飛行で午後チャンギ国際空港に到着しました。30数年振りの訪問で空港は大きく変わり現在は4つのターミナルができていて、JALは第一ターミナルの到着になります。事前にネットで済ませた電子入国登録のおかげで入国審査はスムーズで簡単に入国ができました。

空港から中心地に向かう車中から見る景色は以前とは大きく変わり、道路の脇まで高層の綺麗なマンションが林立していて人口密集に対応しているように感じました。道中の高速道路脇は街路樹や草花で美しく仕上げられているのに驚きました。シンガポールは昔から厳しい規制を行い都市の美化に力を入れてきていますが、経済発展とともに更にその政策に磨きが掛ったように思えました。

◎ マリーナベイエリア (Marina Bay Area)



マリーナベイエリアはシンガポールの開発の象徴的な地域です。マリーナ湾を取り囲むように高層建築が立ち並び遊歩道であるプロムナードで結ばれています。最近は公共性の高い施設整備が進み地元の施設利用者や観光客が快適に過ごせるように整備されていました。

以前からシンガポールのシンボルと言われているマーライオンは一連のベイエリア地区の整備に伴い、移動新設され2002年に湾全体が見渡せる見晴らしの良い場所に建設されました。

新しいマーライオンは、高さ8.6m重量70t

と言う堂々としたモニュメントになり観光客の人気スポットになりました。

ベイエリアで最も目立ち注目されている建築物はマリーナベイ・サンズで超高層のタワーが3棟並び屋上はサンズ・スカイパークと言う1.2haのデッキで結ばれています。プールや展望施設があり大きな空中庭園として利用されています。高層ビルの高層部は3棟に2500室以上の部屋があり低層部は巨大なショッピング・モールとなっています。また公認カジノも併設されていて多くの観光客が訪れています。





このエリアには他にもシンガポール・フライヤーと言う直径 165m のアジア最大級の大観覧車も建設されています。28 人乗りのゴンドラが 30 個付いていて 30 分で 1 回転しながらベイエリアの展望を楽しむことができます。

夜間はこれらの施設のライトアップが特に人気を集めています。

◎ シンガポール植物園 (Singapore Botanic Gardens)



シンガポール植物園を訪問するのは 3 回目になるが訪問するたびに整備が進み充実してきてる感じです。植物園敷地の面積が約 82 万㎡の広大なエリアに 10,000 種を超える植物が植えられているシンガポール最大の植物園です。この植物園は 19 世紀後半のゴムの木栽培の研究や希少な植物の研究などが評価されて、2015 年にシンガポールで初めての世界遺産に登録されました。園内にある国立のラン園では多くのランが栽培されてます。この植物園は国営として運営されており無料で開放されていますが、国立ラン園のみ有料施設となっています。



シンガポールを作ったと言われているラッフルズは植物の研究に力を入れていて、シンガポール島の内陸部の原生林の一部に植物栽培施設を作りランの交配やゴム産業に関する研究施設を作りました。その後 1859 年に現在の「シンガポール植物園」としてオープンして市民の憩いの場として広く開放しました。

シンガポールの国花でもある蘭の花が有名ですが、敷地内にある「ナショナル・オーキッド・ガーデン (National Orchid Garden)」では、長年にわたってランの交配に関する研究を行っており 2000 種以上もの交配種が作られました。シンガポールの在来種であ

り世界最大とも言われる「タイガー・オーキッド」が自生する姿も見られます。



世界市場に出回るランの約 15%がシンガポールで生産されており、主な輸出品である天然ゴムもここで栽培研究されました。この天然ゴムを栽培して輸出したことはシンガポール経済の発展の原動力になりました。

1877 年ロンドンの世界遺産「キュー・ガーデン」からゴムの苗木 22 本と共に初代園長となるリドリー氏が赴任して来ました。ゴム園の経営に携わっていた彼は多くのプラテーションを周りながらゴムの木の栽培研究を開始して 10 年以上の研究の結果、ゴムの木を傷つけずに樹液のみを採取する方法を確立しました。効率の良いゴムの生産技術が開発されたことによりマレー半島全域は活気づき、東南アジア諸国はこれを機に経済的に大きく繁栄するようになりました。

このように、シンガポール植物園は自然豊かな観光スポットとしてだけではなく、シンガポールが歩んできた歴史を象徴する遺跡として、また経済の発展に大いに貢献した研究所としての功績を評価され世界遺産に登録されることとなったのです。

◎ ガーデنز・バイ・ザ・ベイ (Gardens by the Bay)



シンガポール政府は国家緑化政策の象徴として「サステナブルな未来型植物園」として、2012年にマリナ・ベイのエリアにガーデنز・バイ・ザ・ベイをオープンしました。

マリナベイ・サンズの東側の埋め立て地に「シンガポール植物園」より広大な約101万㎡の敷地に3つのゾーンを持つ植物園を建設しました。園内は基本的には無料で開放されており一部の施設は有料となっています。

スーパーツリー・グローブは大小12本の巨大な人工ツリーで構成されOCBCスカイウェイと言う空中回廊によって結ばれています。人工ツリーのシンボルは高さが50mあり、エレベーターで昇ることができここからは園内全体を見渡すことができます。これらは金属パイプで樹木を作りその人工樹木に本物の植物を茂らせています。

園内で目立つ巨大な温室のクラウド・フォレストは世界各地の気候を作り各地域の植物を集めています。熱帯地帯だけではなくシンガポールに無い南アフリカ、地中海、南アメリカや乾燥地域や冷涼な地域の気候を空調により作り出しています。ほかにも霧が出る装置や滝などを作り車いすの対応もできる見学回廊で結ばれています。

熱帯に居ながら寒冷地の環境を体験するのはここできできない不思議な感じがします。



◎ チャンギ国際空港・ Jewel (Changi International Airport・Jewel)



チャンギ国際空港はアジア有数のハブ空港で4つのターミナルで構成されています。24時間対応の空港でアジア地域はもちろん中近東、アフリカ、ヨーロッパ、オセアニアと世界各地に24時間休みなくフライトがあります。

各ターミナルの移動は無料のスカイトレインで結ばれておりそれぞれ5分～10分の乗車で到着できるようになっています。

この空港ターミナルの中核となる Jewel と呼ばれる巨大ドームには多くの飲食店やショッピング街が整備されている他、トランジット・ホテルや休憩ラウンジ、手荷物保管所等の乗客へのサービス施設がターミナル1に隣接して建設されました。この Jewel の中央にはレイン・ボルトックスと言う高さ40mの大きな滝があり周囲には熱帯の樹木や草花がたくさん育てられていて植物園の温室のようです。24時間空港なので夜間もライトアップされいつでも見物できます。



◎ シンガポール国立博物館 (National Museum of Singapore)



シンガポール国立博物館はシンガポール最古の博物館で1877年現在の場所に完成しました。ビクトリア女王在位50年を記念した大きなドームを持つ大きな建物です。（現在ドームは改装工事中）

14世紀から現在までのシンガポールの生い立ちの映像展示やイギリスの植民地時代の1819年～1941年の詳細が展示されています。第二次世界大戦後の1945年以降現在までシンガポールの近代化の変遷が映像を主に展示されています。初代首相のリー・クアン・ユーの功績も

時代を追って合わせて展示されています。最近完成した体験型のデジタルアート「ストーリー・オブ・ザ・フォレスト」は近代型の博物館展示として注目されています。

◎ ナショナル・ギャラリー (National Gallery Singapore)



ナショナル・ギャラリーは1929年建設の市庁舎と1939年に建設された最高裁判所の隣接する二つの歴史遺産である建物を大改修しデッキでつなぎ2015年に開設されました。その後も施設利用しながら改修工事が進められています。64,000㎡という広大な面積の中にシンガポールのローカルアーティストの作品を集めた「シンガポール・ギャラリー」、東南アジアのアーティストの作品を集めた「アジア・ギャラリー」などが配置されています。屋上のオープンデッキは「ソー・テン・フォン・ルーフガーデン・ギャラリー」と称して屋外彫刻が展示されています。

この施設はギャラリーの展示物を鑑賞するだけでなく、旧裁判所の荘厳な法廷、被告人の拘置部屋、円形ドームを持つ法律図書館など建築物の見学をすることができます。



◎ カトンエリア (Katon Area)



カトンエリアはシンガポールの中心部の東側に位置し、ブラナカン文化の中心となる地域で現在もカラフルな古い建築物が多く残っている地域です。

ブラナカン (マレー語で Peranakan) とは、欧米による統治下にあった東南アジアの各地域に 15 世紀後半から数世紀に渡ってマレー半島に永住した主に中華系移民です。

町に立ち並ぶ建築物は中国南部に見られる建築様式で 1 階が店舗 2 階は住居となっており間口は狭く奥行が深い作りになっています。中国の伝統的な建築には無い西洋式の窓、レリーフや円柱、マレー風の装飾を取り入れて独自の折衷様式を確立しました。正面のファサードはカラフルなタイルで飾られる建物が多いです。

ブラナカンの独自の文化はビーズ刺繍、ケバヤと言う刺繍が多く入ったシャツ、鮮やかな色彩の陶器、中国料理とマレー料理が融合されたニョニャ料理など数多く接することができます。

近代的な建築物が多い中心には無いシンガポールの歴史を感じることができるエリアです。

◎ ラッフルズホテル(Raffles Hotel)



ラッフルズホテルは1887年創業からシンガポールを代表するホテルとして有名です。ホテルの名前はイギリスの東インド会社の書記であったラッフルズが1819年にシンガポールに初上陸して港湾整備や都市計画を行い近代シンガポールの礎を作りシンガポールの父と言われるところからつけられています。

2019年に大改装されましたが昔のコロニアル様式の格調を持ったデザインは継承されました。

特に正面玄関の特徴的なファサードはデザインが引き継がれた。

3階建ての全室スイートルームの各部屋はオープンタイプの回廊によって結ばれており、中庭のコートヤードを囲むように開放的に作られてる。

改装前はこのコートヤードにはホテルの利用客のための屋外プールが設置されていたが、改装に伴いプールは3階の屋上に移されました。

ホテルには隣接地に併設されたラッフルズ・ブティックがあり、シンガポールの名産品が用意されています。ホテルにはカクテルで有名なシンガポール・スリング発祥の地であるロングバーがあり、宿泊者以外も利用できるのも観光客に大人気でいつも込み合っています。1920年代のマレー半島のプランテーションをイメージした内装を復元しており、木製の長大なバーカウンターがこの店の由来になっています。

他にも多くの作家が集まったライターズ・バーが正面玄関の脇に作られています。





◎ 市街地の景観 (Urban Landscape)



シンガポールは美しい綺麗な街と一般的に言われています。常夏の気候のシンガポールは植物の生育が良く道路には街路樹が植えられ建築物の壁面緑化も盛んにおこなわれています。市街地のビルが密集した地域でも公園や緑地が作られ綺麗に管理されています。罰金制度があることも影響していると思いますが、町中にはゴミなども無く清掃も行き届いています。バス停などの人が集まる場所にはゴミ箱が設置されて道路美化の役に立っているように思えました。



大宮に重なる時代の景色 ～新都心の摩天楼から氷川の杜、そして大正の盆栽村へ～

尾崎孝行

2026 年 6 月 13 日、初夏の陽光がケヤキの若葉を透かす日、大宮の地を舞台としたまちあるきを実施しました。超高層ビルが立ち並ぶさいたま新都心から、わずか歩いただけで、突如として 2 キロにわたる鎮守の杜の参道に迷い込む。その落差こそが、この日歩いた大宮という土地が持つ、最大の魅力であったように思います。

1. さいたま新都心 ― 計画都市が刻む新しい景観

集合場所のさいたま新都心駅に降り立つと、まず目に入るのは、超高層オフィスビルや複合施設が整然と立ち並ぶ景観です。1998 年、旧大宮操車場の跡地を再開発して誕生したこのエリアは、いわば人の手によって一から構想された「計画都市」の姿そのものです。広々としたペデストリアンデッキを歩きながら、私たちはこれから向かう古社・古刹の景観とはあまりにも対照的な、現代日本の都市開発の縮図をまず目の当たりにしました。この新しい景観が、すぐ後に控える千年規模の歴史的景観への入口になっているという事実こそ、大宮という土地の重層性を物語っているように感じられました。



2. 一の鳥居、そして「時間の長さ」としての参道景観

さいたま新都心駅から歩みを進めると、ほどなくして氷川参道の一の鳥居に至ります。ここから氷川神社の社殿まで、参道は実に 2 キロ続きます。日本最長と称されるこの参道は、単に距離が長いというだけでなく、歩く者に「時間の長さ」を体感させる構造を持っていると感じました。両脇に連なるケヤキ並木は、江戸期から守り継がれてきたもの。歩くごとに変化する木漏れ日の表情を追いながら、参道の途中では旧加賀前田家屋敷門にも立ち寄りました。加賀百万石の格式を伝えるこの門が、説明板もなく静かに街並みに溶け込んでいる様子には、保存と継承の難しさを考えさせられる場面でもありました。



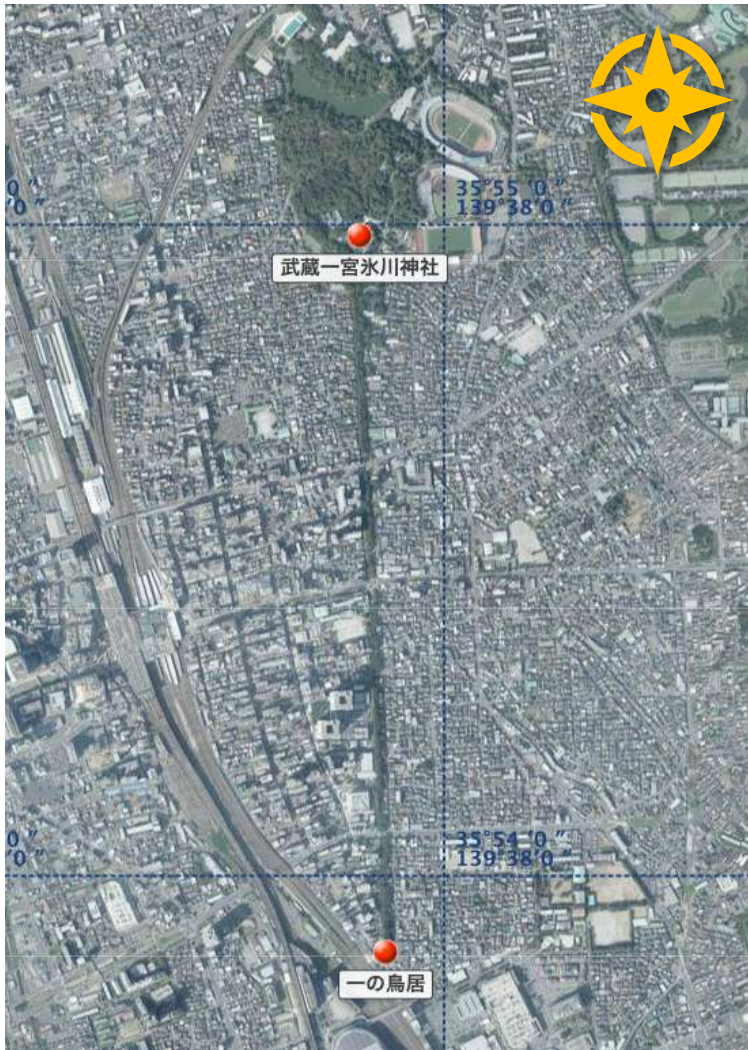
出典：氷川の杜まちづくり推進協議会「氷川参道のまちづくり」



3. 武蔵一宮氷川神社 — 北を向く社殿が語るもの

三の鳥居をくぐり、楼門へと至ると、2500年余りという気の遠くなるような歴史を持つ武蔵一宮氷川神社の境内が広がります。この神社の社殿は、南から北へと一直線に配置されているという、全国的にも稀な構成を持つことで知られています。神池を抱く境内の雑木林は、都市公園のただ中にありながら、まるで時代から隔絶されたかのような静謐さを保っていました。多くの摂社・末社が点在する境内を巡りながら、信仰の重層性を肌で感じる時間となりました。





4. 大宮盆栽村 — 大正の記憶が息づく住宅地

神社を辞し、北へ向かうと、住宅地の中に老舗盆栽園の門構えが点在する「大宮盆栽村」へと至ります。1923年の関東大震災を機に、東京・団子坂周辺の盆栽師たちが移り住んでこの地に集落を築いたという経緯を知ると、何気ない住宅地の風景が、にわかに別の表情を見せ始めます。門の向こうに見える樹齢数百年の名樹の数々は、住まいと生業と自然とが密接に結びついた、稀有な文化的景観そのものでした。続く大宮盆栽美術館では、世界唯一という公立の盆栽専門美術館として、エゾ松「轟」をはじめとする名品の数々に時を忘れて見入りました。



5. 鉄道のまち・大宮へ

行程の終盤、鉄道博物館の外観とてっぱく広場に立ち寄りしました。1885年の大宮工場開設以来、この地が「鉄道のまち」として近代日本の発展を支え続けてきた歴史に思いを巡らせながら、最後は大宮駅へ。新都心の超高層景観から始まったこの日の歩みは、鉄道という、もう一つの近代の象徴をもって幕を閉じました。



むすびに

一日で歩いた大宮の道のりは、わずか数キロでありながら、平成の都市開発、江戸期の参道、古代の信仰、大正期の文化的集落、そして近代の鉄道産業という、幾重もの時代の地層を踏み歩くものでした。景観とは、ただそこにある風景ではなく、土地に積み重ねられた人々の営みそのものであることを、改めて実感する一日となりました。ご参加いただいた会員の皆様、暑い中ありがとうございました。

＜LFJブックレビュー 92＞

『遠近法の世界史』—人間の眼は空間をどうとらえてきたか

佐藤忠良・中村雄二郎・小山清男・若桑みどり・中原佑介・神吉敬三著

平凡社 1992 年刊

齊藤全彦

人間には五感というものがある。視覚・聴覚・臭覚・味覚・触覚であるが、恐らく人間生活の上で視覚が最も重要な機能を持っているのではないか。人類は見ることによって世界を把握してきたのであろう。先ず、視覚によって目の前の「もの」を発見し、それがどのようなものであるかを聴覚、臭覚、味覚、触覚で認識を深めてゆく。従って、視覚こそが人類の生きるスタートであった。遠近法はもしかしたら人類の生きる最小限の基本的ツールではなかったか。

さて、この書は各界6名によって遠近法を人類の重要な精神活動としてとらえ、人間の眼は空間をどうとらえてきたかを探求するものである。

先ず、第1章は「目と手」として彫刻家の佐藤忠良が自己の作品を通して空間をどのように考えるかを述べている。具体的に「母の顔」1942年作、「オリエ」1949年作、「たつろう」1950年作「群馬の人」1952年作、「常磐の大工」1956年作、等々というように人物の頭部からこの問題を語り、野外での作品について彫刻と空間の関係性についてムーアの「門」の事例をあげて説明する。第2章「ルネサンスと人間の目の誕生—等身大空間の発見」については哲学者の中村雄二郎が担当する。近代とは「視覚が五感の中で支配的な意味を持った」ことがその特徴であり、「中世には視覚よりも聴覚の方が重要であった」のが「ルネサンスは感覚の解放」が起これ、「五感の組み換えと優先順位の変化」が生じたということになる。「見る行為にある法則を課して世界を客観視する」という大きな変化が生じた。第3章では「遠近法の成立—図法の原理と絵画空間」と題して美術史家の小山清男が担当する。先ず、ジオットの空間把握を、一点透視、二点透視、三点透視を通じて説明し、フィリッポ・ブルネッレスキの消失点の発見を示し、レオン・バティスタ・アルベルティの『絵画論』から線遠近法理論がどのように発見され、レオナルド・ダ・ヴィンチ、ラッファエロ、ミケランジェロの遠近法へと繋がる。第4章「ルネサンス的空間の崩壊—マニエリスムとバロックへの道」として美術史家の若桑みどりが担当する。さて、近代とは「地球が一個の天体に過ぎず、虚空に浮かび、回っているという事実」を知ってしまったと言う事である。「人間と宇宙とは調和しているという宇宙観」は一気に崩れ去ることになる。第5章「タブローとジオラマ—二つの視座—市民社会と世界空間の発見」は美術評論家の中原佑介が担当。自然科学の急速な発展と共に人間の見るという感覚も大いに刺激されることになる。18世紀の末から1870年代頃にかけて新しいメディアとしてパノラマという考え方が登場する。世界を全体としてとらえたいという人類の欲求である。そして第6章「遠近法への反逆と挑戦—ピカソの目をめぐって」美術史家の神吉敬三が担当。ピカソの出現とは、ルネサンスが確立した再現芸術とは本質的に異なる新しい絵画表現の創造と言う事である。だが、「網膜を間に挟んだ客観と主観、外在的な現実と内在的な現実の葛藤が絵画というかたちで続けられていくことだけは確かであろう。」然りである。（齊藤全彦）



〒150-0032
東京都渋谷区鶯谷町 15-7-401
TEL : 03(3780)3814
FAX : 03(6379)6681
E-mail : info@keikan-forum.com
URL : <https://www.keikan-forum.org>

